
竜と小さな魔術師

桜野猫

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

竜と小さな魔術師

【Nコード】

N3083BA

【作者名】

桜野猫

【あらすじ】

5歳の誕生日に一人で初めていく裏の森！そこで人知れずに魔術の練習をするつもりが、たまたまドラゴンのタマゴを拾ってしまつて・・・

（誤字脱字や、矛盾しているところなどあったら出来る限り早く対応いたしますので、気付きましたら協力お願いします。）

ちょっと特別な朝（1）

ちゅんちゅん、ちゅんちゅんと外で小鳥が鳴いている。

まだ夜が明けてそれほど経っていない時間だ。

いつも僕はこんなに早く起きない。

普通は使用人が起こしに来るまで起きない。

起こしに来てもすぐには起きないけど。

そんな僕がなんで今日こんなに早く起きたのかというと、今日は僕の5歳の誕生日だからだ。

もう昨日から楽しみで楽しみで仕方がなかった。

夜寝るときでさえ、わくわくですぐには眠れなかったくらいだ。

そんなに何が楽しみかって？

それは今日やっと裏の森に一人で行くのを許してもらえるのだ。

少し前にお母様に裏の森に一人で行きたいといったらお母様は、最初は困ったようにしていたが僕が何度も言い続けたら、

「んー、なら5歳の誕生日がきたらいいわ」

と渋々約束してくれた。

裏の森に動物がいるのでお母様はきっと心配しているんだろう。

でも僕には魔術があるからいらない心配してもんだ！

お母様は僕が魔術使えるの知らないと思うけどね。

裏の森なら、気付かれずに魔術の練習が出来そうだから、裏の森に一人でいけるようになるのは、すごく嬉しい。

部屋で魔術の本を見ながら小さな魔術は練習していたんだけど、もっといろんな魔術を試してみたくなったのだ。

今すぐに裏の森に行つて、魔術を試したいけど、勝手に行ったら一人で行くのを禁止にされてしまうかもしれない。だから今は我慢あるのみだ。

そして森に行つてやりたいことを考えながら、にやにやしているうちに半刻（約1時間）ほど経ちやつとみんなが起きてくる時間になった。

僕は森へ行く許しをもらうために一目散にお母様の部屋にむかった。

ダーツと効果音が付きそうなほど勢いよく走っていたら、

「あっお嬢様、廊下を走つてはいけません！」

と、使用人のサキさんが注意してきた。

サキさんは僕が生まれる少し前に働き始めた使用人さんだ。えーっと確か16歳とかいってた気がする。

・・・たぶん。

今度聞いてみよう。

「早くお母様のところに行つて裏の森に行く許しをもらいに行きたいの！」

サキさんの言葉に、僕は足を止めずに返事する。

「もう・・・お嬢様ったら・・・」

後ろでサキさんが、諦めた感じがするがきつと気のせいだ、うん。

あ、そうだ。

「サキさん、おはよう！」

あぶないあぶない、朝のあいさつを忘れるところだった。
しゅくじよたるもの朝のあいさつを忘れちゃだめだもんね。
……しゅくじよってなんだがよくわからないけど。

「あっはい。おはようございますお嬢様」

サキさんは一瞬驚いた顔をして、笑顔で返してくれた。

「じゃ、サキさんまたあとでねー」

僕はサキさんにビシッと敬礼して、今度こそお母様の部屋に走って向かった。

「ほんとにお嬢様は元気いっぱいですねえ・・・」

サキさんはため息混じりにつぶやいて仕事に戻った。

ちょっと特別な朝(2)

僕はコンコンとお母様の部屋の扉をノックした。

「誰かしら？」

お母様のまったりした声が聞こえた。

お母様の声がいつも以上にまったりして聞こえるのはきつとお母様が起きたばかりだからだろう。

「ぼ……わたしです、お母様」

……危なかったあ。

僕なんていったら、お母様に、

『女の子なんだから僕って言っちゃダメでしょ』
って怒られてしまう。

「あら。クーちゃん？ どうぞー入ってきて」

僕はその声で扉を開けてお母様の部屋に入る。

お母様はやっぱりまだ寝巻き姿で眠そうな目をしている。

そしてお母様の隣では妹のエアルがまだ気持ちよさそうに寝ている。
……よだれをたらして。

まあ、まだ2歳だから仕方がないかな。

そしてこの人が僕のお母様のカリン・オルトレアだ。

2児の母とは思えないほどに若いし美人だ。

僕のちょっとした自慢だ。

でも少し前、出来心でお母様に何歳か聞いたらなんかすごく怖い笑顔をされた。

— — — — —

『・・・クーちゃん。・・・おそろしい子』

カリンは、クーリアが部屋から出て行ってから一人うめいたが、それは誰にも届かずただ空しく部屋に消えた。

「おかあしゃまうるしい」

そして寝ぼけたエアルに止めとばかりに蹴りを入れられていた。

— — — — —
— — — — —
— — — — —

「サーキさん」

僕はちょうど食器を並べ終わったばかりのサキさんに飛びついた。

「うひゃあっ！」

サキさんがすごい声を上げて僕をぶら下げたまま飛び上がった。
さすがサキさんだ！

「おおおおお、お嬢様!？」

「今日の朝ごはんなあに？」

僕はサキさんのテンパってるのをわざと無視して朝ごはんを聞く。

「あの、えっと、あのですね。今日は————」

本当は朝ごはんのメニューなんてどうでもいいのだ。

だってサキさんが作るごはんはどんなものでもおいしいもん。

今は森に行けることがうれしくてうれしくて、だからちよっとはしゃいじゃってるのだ。

いつもはこんなにアバレテナイデスヨ？

おいしい朝ごはん

おいしいものを食べたら幸せだと思う。
誰だっておいしいものは好きはずだ。

少なくとも僕はおいしいものが大好きだ。

だっておいしくないものを食べるならおいしいものを食べたほうがいいでしょ？

だから僕はおいしいものを食べたらすごく幸せな気持ちになれるんだ。

サキさんのごはんはすごくおいしいと思う。

でも最初は料理をしたことがなかったらしい。

サキさんに料理を教えたのが、お母様だって言ってた。

ってことは、お母さんのごはんもおいしいのかな？

おかあさんがごはんを作ったことないからすごく気になる。

今度お母さんに聞いてみよう。

ベッドに横になって考えてたら、誰かがコンコンと扉をノックしてきた。

「お嬢様、朝ごはんが出来ましたよ」

ごはんができたって呼びに来てくれたみたいだ。

「はい。すぐ行くー」

僕は返事をして、ベッドからでる。

あ、よだれふいとかなきゃね。

食堂に入ると、

「あー、おねえさまがきたー」

一番最初にエアルが僕に気付いた。

「おはよう、クーリア」

「クーちゃん、おはよう。アルちゃんが待ちくたびれてたわよお」

次にお父様とお母様が僕に気付く。

「おはようございます。お父様、お母様。」

お父様とお母様に朝のあいさつをする。

お母様の向かい側の席に座ってるのが、僕のお父様のカラル・グル・オルトレアだ。

礼儀にはちよつときびしいけど、すごくやさしい。それにかっこいいし、自慢のお父様だ。

あ、そういえばさっきお母様の部屋に行ったときあいさつするの忘れてた……。

お父様の隣が僕の席だ。

僕の前の席は妹のエアルの席。

そしてお父様とは逆の隣の席にサキさんが座っている。

昔は、使用人の私が一緒の席で食べるなんてできませんっていったんだけど、お父様が説得して一緒に食べるようになったらしい。
みんなで一緒に食べたほうがおいしいのに、なんで嫌がってたんだろうね。

今日の朝ごはんは、白パンと野菜がいっぱい入ったスープだ。
おいしそうな匂いでよだれが出そうだ。
すぐにでも食べたいが、ごはんの前には感謝の言葉を言わなきゃダメだ。

「大地の精霊に感謝します」

「かんしゃします」

みんながお父様に続いた。
言ったあとみんな食べ始める。

「はい、アルちゃんあーん。」

「あーん。もぐもぐもぐ」

エアルはごはんを口いっぱいに入れて、ほっぺをばんばんにしている。

僕はそれを見て、動物みたいだなーって思いながら食べ始める。

スープはもちろん、白パンもサキさんの手作りだ。

朝ごはんの前に焼いているらしい。

だからパンはあったかくてふわふわでおいしいのだ。
サキさんが作るごはんはやっぱりおいしい。

すごくおいしくて、すぐ自分の分を食べちゃう。
僕の前のお皿は、きれいにからっぽだ。

森へ行く準備

「そうだクーリア、今日は誕生日だったね」

ご飯を食べ終わったお父様が声をかけてきた。

「なら、今日帰ってくるときにプレゼントを買ってこよう。楽しみにしててね」

「本当ですかお父様！」

そういつて、立ち上がりながらお父様は僕の頭を撫でくれた。

お父様に撫でられるのは好きだ。

すっごくうれしい気持ちになるんだもん。

そして僕のおでこにキスをして、お母様のところに行く。

「じゃあ、僕はそろそろ仕事に行くよ」

と、いってお母様と抱き合ってキスをする。

朝お父様が仕事に行くときにもいつもしている日課だ。

二人は仲がいいと思う。

仲がいいのはいいことだね。

「どうぞ、旦那様」

「ありがとう、サキさん。じゃあ行ってくるよ」

お父様はエアルにもおでこにキスをしてから、サキさんにカバンをもらって食堂を出て行く。

お父様は朝仕事に行ってから、夕方まで帰ってこない。
どんな仕事をしてるんだろう。

ちょっと気になる。

聞けば教えてくれるかな？

みんなごはんを食べ終わったので、サキさんが片づけを始める。

ちなみに一番時間がかかったのがエアルだ。

ついさっき食べ終わったばかりで、今お母様に口をふいてもらっている。

エアルの口をふいてから、お母様片づけを手伝う。

うちのの仕事はお母様とサキさんが二人でやっている。

サキさんは最初お母様が家事をやることをとめていたけどお母様は、

「まあまあ、気にしないで一緒にやりましょう」

と、いつて聞く耳持たなかったらしい。

そしてサキさんは諦めて一緒に家事をやっているわけだ。

それはさておき。

「お母様！ 朝ごはん食べ終わったので裏の森に言ってきていいですか！」

僕は片づけが終わってのんびりしているお母様に、もう少しも待てないとばかりに聞く。

「んーそうねー。約束したものねえ。わかったわ、森にいてもいいわよ。ただあんまり奥に行ったり川に近づいちゃダメよ？」

「わかりました、お母様」

やった！

やっと森に行くことができる。

これでもっと大きな魔術の練習が出来るぞ！

よし、そうと決まったら部屋に戻って準備しなきゃ。

「じゃあ、お母様。ぼく・・・わたしは部屋に戻って準備してきます！」

そういうと同時に（むしろ言いながら）、僕は急いで自分の部屋に戻る。

「あらあら、クーちゃんは元気ねえ。それにしても森にいった何するのかしらねえ」

なんてお母様の、のんきな声が食堂からした。

僕は部屋に入って、動きやすい服に着替える。

昨日から用意してあったカバンに魔術書を入れて、部屋を出る。

あ、そうだ。

サキさんに朝のパンをもらってお弁当にしよう。

残ってるかな？

部屋を出て、食堂に行く。

えーっとサキさんは、と。

あついた。

どうやらキッチンでお昼の仕込みをしているようだ。

「あの、サキさん。朝のパンとかある？」

朝の白パンをもっていけばおべんとうにはちょうどいいだろう。

「パンですか？ えーっとひとつだけ残ってますね。どうするんですか？」

サキさん、はいどうぞって僕にパンを渡しながら聞いてきた。

「えっとね、お弁当にお昼に食べるの」

僕はもらったパンをカバンにしまう。

「言ってくだされば、お弁当作りましたのに」

「朝食べたパンがおいしかったからこれでいいの」

僕は笑顔でそういうと、サキさんは少し照れくさそうにしていた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3083ba/>

竜と小さな魔術師

2012年1月11日03時52分発行